

【論文】

The Mystery of Edwin Drood の原典および Thomas Power James による続編の、 コロケーションによる異同性評価

後 藤 克 己*

1. はじめに

Charles Dickens は *The Mystery of Edwin Drood* (以下、原典) を Serial Fiction (連載物) として 1870 年 4 月から逐次発表していたが、作品を完成させることなく同年 6 月に世を去った。その約 3 年後、米国 Vermont 州 Brattleboro の印刷工 Thomas Power James (以下、T. P. James) は、原典に 23 章もの大部となる続編を加え完全版として発表した (Dickens [James], 1873)。この続編については T. P. James が「Dickens の霊による作¹⁾」(Ibid., 中表紙) とアピールしたこともあり、物語性、人物造型の一貫性、言語的側面等の観点から当時多くの批評がなされた。

その中で B., W. H. (1874)、Gadd (1905)、Doyle (1927) 等によってなされた言語的側面からの批評は、現在多く行われているようなコーパス言語学の手法を用いて、語彙全般にわたって客観的・統計的に評価したものではなかった。当時はまだコンピューターが出現する前であり、それは原典と T. P. James による続編 (以下、続編) の文体の異同性について、通読する中で気づいた点を指摘するという当時の一般的手法によるものであって、批評家によって指摘内容や評価が相異していることもあった。

言語的側面からの文体比較では、生起する語彙に着目した比較が一般に行われており、後藤 (2017) では、使用された語彙の難易度を JACET8000²⁾ のレベルで比較して、原典と続編の作者の識字レベルに差があることを示唆した。一方 Hoover (2003) は、著者推定を行う際、語彙の頻度よりコロケーションの頻度を分析することで、より正しく識別できたとしている。本研究ではこの Hoover の知見を参考にして、コロケーションの生起頻度の観点から両作品の文体の異同性を評価するものである。

*国際人間学研究科言語文化専攻 博士前期課程

2. 方法論

本研究ではコロケーションのうち、5 語クラスター³⁾ および類義語 as if/as though に着目し、AntConc のコンコーダンス機能で生起頻度を分析する。

2.1 5 語クラスター

Mahlberg (2013) は、Dickens の主要な 23 作品によるコーパス (以下、Dcorp⁴⁾) ならびに Dickens 以外の作家・作品による 2 つのコーパス (19 世紀の 18 人の作家による 29 作品 (以下、19C⁵⁾)、および 36 人の作家による 36 作品 (以下、36N⁶⁾) に生起する 2 語から 12 語のクラスターを、WordSmith Tools を用いて抽出・分析している。少語数のクラスターほどクラスター数/生起数は高いが作品固有の特徴性は低く、多語数のクラスターほど、その特徴性は高まるがクラスター数/生起数は低くなることを指摘して、作品への固有性とともに複数作品への共起性に着目した Dickens のクラスター研究に必要なデータ量 (クラスター数/生起数) を確保する観点から 5 語クラスターを選んでいる (Mahlberg, 2013: 61)。そして 19C・36N との間で Dcorp にプラスの優位性があるクラスターを、その属性から表 1 のように 6 つのグループに分類している。

表 1 5 語クラスターの属性による分類一覧

略称	クラスターグループ名	記事
L	Labels クラスター	登場人物・テーマに言及／を同定するもの。名前と同様に用いられる表現。
S	Speech クラスター	登場人物の発話。1 人称または 2 人称の代名詞が用いられるもの。
BP	Body Part クラスター	ボディーランゲージ《身振り・手振りなどによる伝達》。体の一部の名詞を含むもの。
AI	As If クラスター	語り手のコメント／解釈。as if ～ の形。
TP	Time・Place クラスター	時、場所へ言及するもの。
d	Other クラスター	上記 5 分類に明確に当てはまらないもの。

本研究では原典と続編のコーパスに、比較のために発表時期が 1864-5 年と原典 (1870) に近い Dickens の *Our Mutual Friend* (以下、OMF) を加えたコーパスを使用し、Dickens に特徴的とされる 5 語クラスターの生起傾向を比較する。

2.2 類義語 as if/as though

as if/as though “まるで～のように” について、『ロイヤル英文法改訂新版 (綿貫他, 2000 : 560)』には、「as if, as though はともに書き言葉に多い。話し言葉では as though も用いるが, as if のほうが好まれる。」とある。また、OED (ver. 4.0) の項目 as では、以下のように as though

を古風な用法としている。

1. b. Expressing a comparison with a hypothetical fact or state expressed by the subjunctive:
As if, as though. (Cf. 9.) *arch*.
9. a. Introducing a supposition, expressed by the subjunctive mood: As if, as though. *arch*. (Cf. 1b.)

本研究ではこの2つの類義語の生起頻度について、Dickens と同時代の19世紀作家の作品の間で、また続編とDickensのSerial fiction群（原典を含む）の間で比較する。

3. 結果

3.1 5語クラスター

3.1.1 Label クラスター

当5語クラスターの生起頻度を表2に示す。

表2 Label クラスターグループ5語クラスターの生起頻度

Group	5語 Cluster	Dcorp		19C	36N	原典	続編	OMF	Group 小計		
		Freq.	Texts	Freq.	Freq.	Freq.	Freq.	Freq.	原典	続編	OMF
L	the father of the marshalsea	45	1	0	0	0	0	0	3	0	52
L	the person of the house	37	3	0	0	3	0	33			
L	the lady of the caravan	22	1	0	0	0	0	0			
L	captain gills said mr toots	20	1	0	0	0	0	0			
L	mr pickwick and his friends	19	1	0	0	0	0	0			
L	my dear said the jew	19	2	0	0	0	0	1			
L	gentleman in the white waistcoat	18	1	0	0	0	0	0			
L	man of the name of	22	8	1	2	0	0	2			

L	the gentleman in the white	17	1	0	0	0	0	0	3	0	52
L	the six jolly fellowship porters	16	1	0	0	0	0	16			
L	my dear said mrs nickleby	16	1	0	0	0	0	0			
L	mr winkle and mr snodgrass	16	1	0	0	0	0	0			
L	how not to do it	16	1	0	0	0	0	0			
L	my lovely and accomplished relative	16	1	0	0	0	0	0			
L	young man of the name	15	4	0	0	0	0	0			
L	put too fine a point	15	1	0	0	0	0	0			
L	man with the wooden leg	15	2	0	0	0	0	0			
L	not to put too fine	15	1	0	0	0	0	0			
L	to put too fine a	15	1	0	0	0	0	0			
							5 語 Cluster Group		頻度計(10万語換算)		
									原典	続編	OMF
									3.1	0.0	15.6

備考：各グループ 5 語クラスターの生起頻度の表中、Dcorp・19C・36N のコーパスにおける生起頻度は、Mahlberg (2013: 181-182) による。また、表見出しの Freq. は生起頻度を、Texts は、生起した作品数である（以下、同）。

Label クラスターは「登場人物・テーマに言及／を同定するもの」であって、元来作品に固有な性格をもち、表 2 でも、一部の例外（man of the name of や young man of the name など；淡灰色マーキング）を除き、各クラスターはそれぞれ 1 作品にのみ生起している。従って基本的にこのクラスターグループは、個別の作品を離れた文体の類同／相違性に焦点をあてる本研究での比較対象として適したものではない。なお、このグループの中で唯一原典に生起しているクラスター（the person of the house の 3 件；濃灰色マーキング）は、続編には全く生起していないが、このクラスターは登場人物 Rosa の先生である Miss Twinkleton が Rosa にあてた発話の中で、自分と肌の合わない Mrs. Billickin（Rosa の下宿先のおかみ）を指すのに名前の代わりに用いている呼称である。この 3 者が会話する場面が続編にはないことから、続編に生起しないとはいえ文体による相違とは言えない。

3.1.2 Speech クラスター

当5語クラスターの生起頻度を表3に示す。

表3 Speech クラスターグループ5語クラスターの生起頻度

Group	5 語 Cluster	Dcorp		19C	36N	原典	続編	OMF	Group 小計		
		Freq.	Texts	Freq.	Freq.	Freq.	Freq.	Freq.	原典	続編	OMF
S	do me the favour to	32	12	0	4	0	0	2	6	5	24
S	what do you mean by	73	18	15	23	1	2	8			
S	i beg your pardon sir	56	16	11	13	1	1	3			
S	how do you find yourself	23	11	0	0	0	1	0			
S	how do you do mr	29	11	2	2	2	0	0			
S	upon my word and honour	25	8	1	1	0	0	0			
S	beg your pardon sir said	25	6	1	3	0	0	0			
S	what i am going to	29	13	3	5	2	0	8			
S	how do you do sir	23	9	2	1	0	0	0			
S	you be so good as	19	7	1	2	0	1	3			
							5 語 Cluster Group		頻度計(10万語換算)		
									原典	続編	OMF
							Speech		6.3	3.9	7.2

Speech クラスターは登場人物の発話であって、1人称または2人称の代名詞を含む。原典・続編・OMFは三人称語りの作品であることから、これらのクラスターの多くは発話部に生起するものと思われる。

続編におけるクラスター全体の10万語換算生起数は、原典の62%／OMFの54%であり、続編に少ないとはいえ大差があるとはいえない。

3.1.3 Body Part クラスター

当5語クラスターの生起頻度を表4に示す。

表 4 Body Part クラスタグループ 5 語クラスターの生起頻度

Group	5 語 Cluster	Dcorp		19C	36N	原典	続編	OMF	Group 小計		
		Freq.	Texts	Freq.	Freq.	Freq.	Freq.	Freq.	原典	続編	OMF
BP	his hands in his pockets	90	20	13	15	0	1	5	6	1	24
BP	with his hands in his	60	20	12	13	0	(1)	(2)			
BP	hands in his pockets and	40	17	5	5	0	(1)	(3)			
BP	with his hand to his	31	10	2	3	3	0	13			
BP	his head as if he	18	12	0	1	0	0	2			
BP	laying his hand upon his	22	7	1	0	0	0	0			
BP	the palms of his hands	17	10	0	0	3	0	1			
BP	his head on one side	30	11	4	2	0	0	3			
							5 語 Cluster Group		頻度計(10万語換算)		
									原典	続編	OMF
							Body Part		6.3	0.8	7.2

備考：原典・続編・OMF の各クラスターの生起数については、Dcorp・19C・36N における生起数と対比するため、生起用例が同じでもクラスター毎に重複してカウントし、括弧付きの表示（再掲数）としている。Group 小計については生起する用例数でカウントすることとし、この再掲数はカウントしていない（以下、同）。

Body Part クラスタは、「身振り・手振りとして体の一部の名詞を含むもの」であるが、その名詞は手、顔、頭といった一般的語彙であって、その生起頻度の作品内容との関連性は低く、文体の比較に適したクラスタグループである。また、Dcorp では生起頻度が特に高いことに加えて、多くの作品に生起しており、まさに Dickens 作品の文体を特徴づけるクラスタと考えられる。当クラスタの続編での生起数は、原典／OMF と比べて圧倒的に少ない。続編に 1 件（淡灰色マーキング）生起しているが、これは 19C と 36N のコーパスにも比較的多く見られるクラスタである。一方、原典の 6 件（濃灰色マーキング：with his hand to his と the palms of his hands、各 3 件）は、19C・36N には少なく Dcorp に顕著なクラスタであるが続編には生起していない。

3.1.4 As If クラスター

当5語クラスターの生起頻度を表5に示す。

表5 As If クラスターグループ5語クラスターの生起頻度

Group	5 語 Cluster	Dcorp		19C	36N	原典	続編	OMF	Group 小計		
		Freq.	Texts	Freq.	Freq.	Freq.	Freq.	Freq.	原典	続編	OMF
AI	as if he would have	41	15	2	4	2	0	4	8	1	21
AI	as if he were a	45	16	7	9	3	1	5			
AI	as if he were going	32	12	3	4	3	0	2			
AI	as if it were a	72	18	23	26	0	0	10			
							5 語 Cluster Group		頻度計 (10万語換算)		
									原典	続編	OMF
							As If		8.3	0.8	6.3

As If クラスターは、「まるで～のように」と表現内容を補足するものであり、Body Part クラスターの場合と同様に、その生起頻度の作品内容との関連性は低く、文体の比較に適したクラスターグループである。また Body Part クラスターと同様に、Dcorp において生起頻度・作品数が共に高く、Dickens 作品の文体を特徴づけるクラスターと考えられる。このクラスターの続編での生起数は、原典／OMF と比べて圧倒的に少ない。

3.1.5 Time・Place クラスター

当5語クラスターの生起頻度を表6に示す。

表6 Time・Place クラスターグループ5語クラスターの生起頻度

Group	5 語 Cluster	Dcorp		19C	36N	原典	続編	OMF	Group 小計		
		Freq.	Texts	Freq.	Freq.	Freq.	Freq.	Freq.	原典	続編	OMF
TP	at the upper end of	23	11	1	2	1	0	0	2	6	5
TP	on the opposite side of	54	17	15	19	(1)	(1)	5			
TP	after a great deal of	16	5	0	1	0	2	0			
TP	the opposite side of the	70	19	26	34	1	4	(5)			

5 語 Cluster Group	頻度計(10万語換算)		
	原典	続編	OMF
Time & Place	2.1	4.6	1.5

このクラスターは、全体として続編に多く生起しているが、その6件中4件 (the opposite side of the ; 灰色マーキング) は、19C・36N のコーパスにも多く生起するクラスターである。OMFに生起する5件についても同様である。なお、Mahlberg (2013 : 41) は、「Time・Place クラスターは一般的な字句機能をより多く有しており、Dickens に特徴的なテクニックと関連づけにくい」として、同書では概略的な扱いにとどめている。

3.1.6 Others クラスター

当5語クラスターの生起頻度を表7に示す。

表7 Others クラスターグループ5語クラスターの生起頻度

Group	5 語 Cluster	Dcorp		19C	36N	原典	続編	OMF	Group 小計		
		Freq.	Texts	Freq.	Freq.	Freq.	Freq.	Freq.	原典	続編	OMF
d	go so far as to	24	13	0	1	0	0	4	4	7	19
d	on the part of mr	34	11	3	3	0	2	1			
d	on the part of the	65	17	18	18	2	3	9			
d	be this as it may	17	13	0	0	1	0	0			
d	it was in vain for	17	11	0	1	0	0	0			
d	in the very act of	25	9	2	2	0	0	1			
d	leaning back in his chair	38	13	8	8	0	2	2			
d	down his knife and fork	20	9	1	1	1	0	0			
d	one thousand seven hundred and	15	3	0	0	0	0	0			
d	make up his mind to	25	12	3	5	0	0	2			
							5 語 Cluster Group	頻度計(10万語換算)			
								原典	続編	OMF	
							Others	4.2	5.4	5.7	

このクラスターは3作品にはほぼ同頻度で生起している。続編の7件中5件(淡灰色マーキング: on the part of the 3件、leaning back in his chair 2件)は、19C・36Nのコーパスにも比較的多く生起するクラスターである。一方で原典の4件中2件のクラスター(濃灰色マーキング: be this as it may と down his knife and fork)は、19C・36Nには殆ど生起せず Dcorp に顕著なクラスターであるが続編にも *OMF* にも生起していない。このような相異はあるものの、3作品における際立った差異は見出せない。

3.1.7 まとめ

3.1.1～6節の各クラスターグループでの比較結果を、表8にまとめた。各グループの中で特に Dickens 作品の文体比較に向くと考えられる Body Part と As If のクラスターにおいて、続編での生起数は原典／*OMF* より圧倒的に少ないといえる。

表8 各クラスターグループにおける生起頻度一覧

5 語 Cluster Group	頻度計 (10 万語換算)		
	原典	続編	<i>OMF</i>
Label	3.1	0.0	15.6
Speech	6.3	3.9	7.2
Body Part	6.3	0.8	7.2
As If	8.3	0.8	6.3
Time & Place	2.1	4.6	1.5
Others	4.2	5.4	5.7

3.2 類義語 as if/as though

3.2.1 Dickens と同時代の 19 世紀英米作家の作品における生起頻度

Dickens 以外の作家を含め、as if/as though の作家による嗜好傾向を分析する。まず、19 世紀後半のイギリス英語(以下、Br-E)作品に生起する as if/as though の頻度を表9に示す。

表9 Br-E 作品に生起する as if/as though の頻度

作家・作品	トークン数	作品別の生起頻度		作家別の生起頻度・比率			
		as if	as though	as if	as though	as if	as though
Toynbee, A. (1852–83) <i>The Industrial Revolution</i>	45,341	2	0	2	0	100%	0%

Trollope, A. (1874) <i>Lady Anna</i>	141,276	3	49	12	157	7%	93%
Trollope, A. (1867-9) <i>Phineas Finn</i>	266,593	9	108				
Darwin, C. (1859) <i>On the Origin of Species</i>	160,141	14	0	14	0	100%	0%
Dickens, C. (1859) <i>A Tale of Two Cities</i>	138,720	121	13	319	46	87%	13%
Dickens, C. (1854) <i>Hard Times</i>	106,005	93	7				
Dickens, C. (1870) <i>The Mystery of Edwin Drood</i>	96,251	105	26				
Gaskell, E. (1857) <i>A Visit To Eton</i>	2,401	0	0	6	2	75%	25%
Gaskell, E. (1865) <i>Some Passages from the History of the Chomley Family</i>	11,922	5	2				
Gaskell, E. (1853) <i>Uncle Peter</i>	15,503	1	0				
Eliot, G. (1871) <i>Middlemarch</i>	324,313	284	1	354	1	100%	0%
Eliot, G. (1861) <i>Silas Marner</i>	74,266	70	0				
Wells, H. G. (1897) <i>The Invisible Man</i>	50,306	12	7	37	16	70%	30%
Wells, H. G. (1898) <i>The War of the Worlds</i>	60,964	25	9				
Ruskin, J. (1862) <i>Unto this last four essays on the first principles of political economy</i>	31,139	6	0	6	0	100%	0%
Mill, J. S. (1859) <i>Essay on Liberty</i>	48,414	13	0	13	0	100%	0%
Carroll, L. (1866) <i>Alice's Adventures in Wonderland</i>	27,894	13	0	13	0	100%	0%

Wilde, O. (1891) <i>The Birthday of the Infanta</i>	7,723	2	1	41	18	69%	31%
Wilde, O. (1890) <i>The Picture of Dorian Gray</i>	80,802	39	17				
Kipling, R. (1889-98) <i>American Notes</i>	27,357	2	3	2	3	40%	60%
Stevenson, R. L. (1884) <i>The Silverado Squatters</i>	31,935	12	7	51	21	71%	29%
Stevenson, R. L. (1886) <i>The Strange Case of Dr Jekyll and Mr Hyde</i>	26,142	11	6				
Stevenson, R. L. (1883) <i>Treasure Island</i>	70,806	28	8				
Butler, S. (1872) <i>Erewhon; or, Over the range</i>	85,147	1	34	1	34	3%	97%
Hardy, T. (1878) <i>Return of the native</i>	145,678	99	5	99	5	95%	5%
Blades, W. (1888) <i>The Enemies of Books</i>	23,978	4	0	4	0	100%	0%
Morris, W. (1888; 1886-7) <i>A Dream of John Ball and a King's Lesson</i>	32,503	15	14	15	14	52%	48%
Br-E 作品での計	2,133,520	989	317	989	317	76%	24%

表9に含まれる Br-E 作品全体では、76%の箇所では as if を用いており、作家では 17 人中 13 人が、それぞれの作品に as if を多く用いている。それ以外の 4 人中 2 人 (Kipling と Morris; 淡灰色マーキング) は as if と as though を同程度に用いており、残る 2 人 (Trollope と Butler; 濃灰色マーキング) は圧倒的に as though を多く用いている。

次に、アメリカ英語 (以下、Am-E) 作家の作品に生起する as if/as though の頻度を表 10 に示す。

表 10 に含まれる Am-E 作品全体では、88%の箇所では as if を用いていて、作家では 41 人中 35 人が、それぞれの作品に as if を多く用いている。それ以外の 6 人中 4 人 (Cary, Browne, Eggleston, および Cooke; 淡灰色マーキング) は as if と as though を同程度に用いており、残る 2 人 (Wharton と Davis; 濃灰色マーキング) は圧倒的に as though を多く用いている。ここで興味深いのは、この Davis が *The Reporter Who Made Himself King* では、as if と as though をほぼ同頻度 (5:4 で as if が多い) に用いていることである。なお、この作品の as if と as though を合計した 10 万語当りの相対生起頻度は、Davis の他作品のその 1/2 以下であり、作品のレジスター (ジャンル) / テキストカテゴリーによる選択の相違である可能性もある。

この Davis の例外的ともいえるケースを除けば、本節で複数作品を比較した作家では as if/as though の生起傾向は一貫しており、どちらを用いるかは作家の文体（嗜好）によるものと推定される。

表 10 Am-E 作品に生起する as if/as though の頻度

作家・作品	トークン数	作品別の生起頻度		作家別の生起頻度・比率			
		as if	as though	as if	as though	as if	as though
Cary, A. (1852) <i>Clovernook, or Recollections of our Neighborhood in the West</i>	132,412	35	63	107	133	45%	55%
Cary, A. (1853) <i>Clovernook, or Recollections of our Neighborhood in the West Vol. 2</i>	136,931	72	70				
Evans, A. J. (1867) <i>St. Elmo: A Novel</i>	187,439	70	1	70	1	99%	1%
Harte, B. (1873) <i>Mrs. Skaggs's Husbands</i>	79,210	34	4	54	14	79%	21%
Harte, B. (1870) <i>The Luck of Roaring Camp</i>	55,157	20	10				
Shillaber, B. P. (1859) <i>Knitting-Work</i>	119,220	61	35	61	35	64%	36%
Taylor, B. (1864) <i>John Godfrey's Fortunes</i>	172,991	75	0	75	0	100%	0%
Browne, C. F. (1862) <i>Artemus Ward, His Book</i>	39,252	2	1	2	2	50%	50%
Browne, C. F. (1865) <i>Artemus Ward, His Travels</i>	39,737	0	1				
Halpine, C. G. (1864) <i>The Life and Adventures, . . .</i>	46,973	9	2	9	2	82%	18%
Sedgwick, C. M. (1857) <i>Married or Single Vol. 1</i>	80,271	54	0	133	0	100%	0%
Sedgwick, C. M. (1857) <i>Married or Single Vol. 2</i>	90,409	79	0				

Locke, D. R. (1864) <i>The Nasby Papers</i>	21,684	0	0	0	0	—	—
Bennett, E. (1851) <i>The League of the Miami</i>	66,227	18	7	18	7	72%	28%
Eggleston, E. (1872) <i>The End of the World</i>	71,050	11	12	11	12	48%	52%
Phelps, E. S. (1869) <i>The Gates Ajar</i>	51,006	31	0	31	0	100%	0%
Wharton, E. (1900) <i>The Touchstone</i>	27,716	2	25	2	25	7%	93%
Curtis, G. W. (1856) <i>Prue and I</i>	46,033	62	0	344	0	100%	0%
Curtis, G. W. (1861) <i>Trumps: A Novel</i>	152,005	282	0				
Alger, H. (1900) <i>Bound to Rise</i>	28,015	7	0	19	0	100%	0%
Alger, H. (1868) <i>Struggling Upward</i>	53,047	12	0				
Stowe, H. B. (1862) <i>Agnes of Sorrento</i>	118,053	78	0	242	0	100%	0%
Stowe, H. B. (1878) <i>Poganuc People: Their Loves and Lives</i>	82,075	51	0				
Stowe, H. B. (1852) <i>Uncle Tom's Cabin Vol. 1</i>	94,841	63	0				
Stowe, H. B. (1852) <i>Uncle Tom's Cabin Vol. 2</i>	96,303	50	0				
Thoreau, H. D. (1865) <i>Cape Cod</i>	78,524	80	0	323	2	99%	1%
Thoreau, H. D. (1858) <i>The Maine Woods</i>	104,122	101	1				
Thoreau, H. D. (1854) <i>Walden, or Life in the woods</i>	107,973	142	1				
Spofford, H. E. P. (1871) <i>New-England Legends</i>	37,666	11	0	11	0	100%	0%

Jackson, H. H. (1884) <i>Ramona</i>	159,789	129	0	129	0	100%	0%
James, H. (1879) <i>Confidence</i>	78,072	60	0	226	0	100%	0%
James, H. (1879) <i>Daisy Miller: A Study</i>	22,210	17	0				
James, H. (1888) <i>The Aspern Papers</i>	39,829	89	0				
James, H. (1898) <i>The Turn of the Screw</i>	43,651	60	0				
Melville, H. (1851) <i>Moby-Dick</i>	224,188	134	29	270	32	89%	11%
Melville, H. (1857) <i>The Confidence-Man</i>	97,018	56	2				
Melville, H. (1856) <i>The Piazza Tales</i>	85,683	80	1				
Shaw, H. W. (1866) <i>Josh Billings, Hiz Sayings</i>	36,694	0	0	0	0	—	—
Cooke, J. E. (1869) <i>Mohun</i>	171,774	15	25	62	45	58%	42%
Cooke, J. E. (1856) <i>The Sparrowgrass Papers</i>	70,818	29	2				
Cooke, J. E. (1867) <i>Wearing of the Gray</i>	198,737	18	18				
Austin, J. G. (1865) <i>Dora Darling; the Daughter of the Regiment</i>	87,770	44	0	44	0	100%	0%
Ingraham, J. H. (1859) <i>The Pillar of Fire</i>	168,164	87	0	198	0	100%	0%
Ingraham, J. H. (1855) <i>The Prince of the House of David</i>	135,844	111	0				
Trowbridge, J. T. (1873) <i>Coupon Bonds, and Other Stories</i>	128,937	68	8	68	8	89%	11%
Moulton, L. C. (1859) <i>My Third Book</i>	118,612	58	0	58	0	100%	0%

Alcott, L. M. (1866) <i>Behind a Mask: or, A Woman's Power</i>	41,689	80	0	341	0	100%	0%
Alcott, L. M. (1869) <i>Little Women</i>	191,542	261	0				
Child, L. M. F. (1867) <i>A Romance of the Republic</i>	130,761	84	0	84	0	100%	0%
Wallace, L. (1873) <i>The Fair God</i>	183,014	96	2	96	2	98%	2%
Holmes, M. J. (1864) <i>Darkness and Daylight. A Novel</i>	130,402	120	0	120	0	100%	0%
Twain, M. (1884) <i>Adventures of Huckleberry Finn</i>	116,865	8	0	105	1	99%	1%
Twain, M. (1897) <i>Following the Equator: a journey around the world</i>	192,210	38	0				
Twain, M. (1883; 1870) <i>Life on the Mississippi</i>	147,428	33	0				
Twain, M. (1893-4) <i>The Comedy of Those Extraordinary Twins</i>	22,696	5	0				
Twain, M. (1882) <i>The Prince and the Pauper; a tale for young people of all ages</i>	72,047	21	1				
Hawthorne, N. (1851) <i>The House of the Seven Gables</i>	106,675	125	1	125	1	99%	1%
Willis, N. P. (1853) <i>Fun-Jottings</i>	111,302	61	0	61	0	100%	0%
Emerson, R. W. (1856) <i>English Traits</i>	65,646	36	0	36	0	100%	0%

Davis, Ri. H. (1897) <i>Soldiers of Fortune</i>	80,113	2	94	11	194	5%	95%
Davis, Ri. H. (1891) <i>The King's Jackal</i>	30,551	2	41				
Davis, Ri. H. (1899) <i>The Lion and the Unicorn</i>	39,471	2	55				
Davis, Ri. H. (1891) <i>The Reporter Who Made Himself King</i>	17,890	5	4				
Crane, S. (1898) <i>The Monster</i>	21,771	35	0	121	0	100%	0%
Crane, S. (1895) <i>The Red Badge of Courage</i>	47,516	86	0				
Aldrich, T. B. (1874) <i>Prudence Palfrey. A Novel</i>	57,035	36	2	36	2	95%	5%
Dreiser, T. (1900) <i>Sister Carrie</i>	160,391	126	12	126	12	91%	9%
Higginson, T. W. (1869) <i>Malbone an Oldport romance</i>	47,871	72	0	72	0	100%	0%
Whitman, W. (1875-6) <i>Memoranda During the War</i>	36,035	12	0	12	0	100%	0%
Am-E 作品での計	6,335,053	3,913	530	3,913	530	88%	12%

3.2.2 原典・続編・他の Dickens 作品における生起頻度

原典、続編、および OMF を含む Dickens 作品で、その形態が Serial Fiction とされる 14 作について、as if/as though の生起頻度を比較した結果を表 11 に示す。

前節の結果と同様に、Dickens の Serial Fiction 15 作（原典を含む）でも、一貫して as if が好まれ、約 89% の箇所 で用いているが、続編では as though が 86% と圧倒的に多く用いられており、続編での嗜好は Dickens の Serial Fiction における嗜好と逆になっている。

表 11 Dickens 作品に生起する as if/as though の頻度

作品名	トークン数	生起頻度		生起比率	
		as if	as though	as if	as though
<i>Pickwick Papers</i>	336,960	180	0	100%	0%
<i>Oliver Twist</i>	162,313	127	26	83%	17%
<i>Nicholas Nickleby</i>	353,860	236	69	77%	23%
<i>The Old Curiosity Shop</i>	233,983	183	38	83%	17%
<i>Barnaby Rudge</i>	273,499	188	113	62%	38%
<i>Martin Chuzzlewit</i>	368,105	336	34	91%	9%
<i>Dombey and Son</i>	384,667	414	20	95%	5%
<i>David Copperfield</i>	384,062	393	8	98%	2%
<i>Bleak House</i>	362,303	311	15	95%	5%
<i>Hard Times</i>	113,560	93	7	93%	7%
<i>Little Dorrit</i>	363,237	348	34	91%	9%
<i>A Tale of Two Cities</i>	145,314	121	13	90%	10%
<i>Great Expectations</i>	199,460	266	12	96%	4%
<i>Our Mutual Friend</i>	334,139	392	37	91%	9%
<i>The Mystery of Edwin Drood</i> 以外の Serial Fiction 14 作品	4,015,462	3,588	426	89%	11%
<i>The Mystery of Edwin Drood</i>	95,983	105	26	80%	20%
T. P. James による続編	129,253	19	118	14%	86%

4. 結論

文体特徴をより明確に反映していると思われる Body Part と As If5 語クラスターの、原典・続編・OMFでの生起数は表12～13のとおりであった。

いずれのグループでも続編での生起数は、10万語換算で原典・OMFの約1/8以下であり大差があった。

類義語 as if/as though の、19世紀後半の Dickens と同時代の 58 人の英米作家・作品による比較において、Br-E 作品では 17 人中 Dickens を含む 13 人が、また Am-E 作品では 41 人中 35 人が、それぞれの作品に as if を多く用いていた。一方、as though を圧倒的に多く用いる作家は、英米それぞれ 2 人であり、19 世紀後半の作家で as though を好むのはごく一部であると考えられる。また、同じ作家の作品には、概ね一貫した as if/as though の嗜好がうかがえ、どちらを用いるかは作家の文体によるものと推定される。

表 12 Body Part グループの生起数

5 語 Cluster	生起数		
	原典	続編	OMF
his hands in his pockets	0	1	5
with his hands in his	0	(1)	(2)
hands in his pockets and	0	(1)	(3)
with his hand to his	3	0	13
his head as if he	0	0	2
laying his hand upon his	0	0	0
the palms of his hands	3	0	1
his head on one side	0	0	3
生起数計	6	1	24
5 語 Cluster Group	10 万語換算		
	原典	続編	OMF
Body Part	6.3	0.8	7.2

備考：表中で括弧つきの生起数は、生起用例が他の類似クラスターと共通であることを示しており再掲である。

表 13 As If グループの生起数

5 語 Cluster	生起数		
	原典	続編	OMF
as if he would have	2	0	4
as if he were a	3	1	5
as if he were going	3	0	2
as if it were a	0	0	10
生起数計	8	1	21
5 語 Cluster Group	10 万語換算		
	原典	続編	OMF
As If	8.3	0.8	6.3

Dickens の Serial Fiction 15 作について比較した結果の概要を表 14 に示す。

表 14 Dickens 作品と続編における as if/as though の生起頻度

作品	生起比率	
	as if	as though
原典を除く Dickens の Serial Fiction 14 作品	89%	11%
原典	80%	20%
続編	14%	86%

Dickens と同時代の作家の多くと同様に、Dickens の Serial Fiction では約 89% の箇所、また各作品に一貫して as if が好まれていた。一方続編では 86% の箇所に as though が用いられており、この類義語の嗜好は逆転していた。

以上の結果、Dickens 作品に特徴的とされる 5 語クラスターについては、続編では原典／OMF と比較してその生起頻度が圧倒的に少なく、さらに類義語 as if/as though については完全

に逆の嗜好が見られた。従って、これらのコロケーションの嗜好に表れる続編の文体は原典とは相異なるものと考えられる。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、主指導教授の大門正幸先生にはテーマの選定以降全般にわたり詳細なご指導をいただきました。また、副指導教授の西村智先生には特に文学批評の観点から、柳朋宏先生にはコーパス言語学全般についてご指導をいただき、多くの貴重なご指摘をいただきました。ここに記して深く感謝します。

注

- 1) 以下、日本語訳は全て筆者による。
- 2) 大学英語教育学会 (JACET) による語彙集。基本 8000 語が 8 つにレベル分けされている。
- 3) クラスターはコロケーションの 1 つのタイプと考えられる (堀, 2009)。
- 4) 含まれる作品は付 1 参照。
- 5) 含まれる作品は付 2 参照。
- 6) 含まれる作品は付 3 参照。

参考文献

- B., W. H. (1874) "Review. Part Second of *The Mystery of Edwin Drood*." *The Southern Magazine*, 14 (February 1874): 219-23.
- Dickens, Charles [& T. P. James] (1873) *Part Second of the Mystery of Edwin Drood. By the Spirit-Pen of Charles Dickens, Through a Medium. Embracing, Also That Part of the Work Which Was Published prior to the Termination of the Author's Earth-Life*. Brattleboro, VT.: T. P. James.
- Doyle, Arthur Conan (1927) "The Alleged Posthumous Writings of Great Authors." *The Bookman* 66, New York. [Online]. URL: <https://www.unz.org/Pub/Bookman-1927dec-00342>
- Gadd, George F. (1905) "The History of a Mystery. A Review of the Solutions to 'Edwin Drood' (Chs. 3 & 4)." *The Dickensian* 1: 270-273.
- Hoover, David L. (2003) "Frequent Collocations and Authorial Style." *Literary and Linguistic Computing*, 18(3): 261-286.
- Mahlberg, Michaela (2013) *Corpus Stylistics and Dickens's Fiction*. New York: Routledge.
- 相澤一美・石川慎一郎・村田年 (共編) (2005) 『「大学英語教育学会基本語リスト」に基づく JACET8000 英単語』東京：桐原書店。
- 後藤克己 (2017) 「The Mystery of Edwin Drood の原典および Thomas Power James による続編における語彙の豊かさの評価」『国際人間学フォーラム』第 13 号：1-12.
- 堀正広 (2009) 『英語コロケーション研究入門』東京：研究社。
- 綿貫陽・宮川幸久・須貝猛敏・高松尚弘 (2000) 『ロイヤル英文法 改訂新版』東京：旺文社。

付録

付 1 Dickens の主要 23 作品 (Dcorp)
(Mahlberg, 2013: 43)

Title
American Notes for General Circulation
<i>Bleak House</i>
The Battle of Life
<i>Barnaby Rudge</i>
A Christmas Carol
The Cricket on the Hearth
The Chimes
<i>David Copperfield</i>
<i>Dombey and Son</i>
<i>The Mystery of Edwin Drood</i>
<i>Great Expectations</i>
<i>Hard Times</i>
The Haunted Man and the Ghost's Bargain
<i>Little Dorrit</i>
<i>Martin Chuzzlewit</i>
<i>Nicholas Nickleby</i>
<i>The Old Curiosity Shop</i>
<i>Oliver Twist</i>
<i>Our Mutual Friend</i>
<i>The Pickwick Papers</i>
Sketches by Boz
<i>A Tale of Two Cities</i>
The Uncommercial Traveller

付 2 Dickens 以外の 18 人の作家による 29 作品 (19C)
(Mahlberg, 2013: 179)

Title	Author
<i>Emma</i>	Jane Austen
<i>Persuasion</i>	—
<i>Pride and Prejudice</i>	—
<i>Lady Audley's Secret</i>	Mary Elizabeth Braddon
<i>Agnes Grey</i>	Anne Brontë
<i>Jane Eyre</i>	Charlotte Brontë
<i>The Professor</i>	—
<i>Wuthering Heights</i>	Emily Brontë
<i>The Last Days of Pompeii</i>	Edward George Bulwer-Lytton
<i>Antonina or, the Fall of Rome</i>	Wilkie Collins
<i>Armada</i>	—
<i>The Woman in White</i>	—
<i>Sybil, or the Two Nations</i>	Benjamin Disraeli
<i>Vivian Grey</i>	—
<i>The Hound of the Baskervilles</i>	Sir Arthur Conan Doyle
<i>Daniel Deronda</i>	George Eliot
<i>The Mill on the Floss</i>	—
<i>Cranford</i>	Elizabeth Gaskell
<i>Mary Barton</i>	—
<i>North and South</i>	—
<i>Jude the Obscure</i>	Thomas Hardy
<i>The Return of the Native</i>	—
<i>Tess of the D'Urbervilles</i>	—
<i>Frankenstein</i>	Mary Shelley
<i>The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde</i>	Robert Louis Stevenson
<i>Dracula</i>	Bram Stoker
<i>Vanity Fair</i>	William Makepeace Thackeray
<i>The Small House at Allington</i>	Anthony Trollope
<i>The Picture of Dorian Gray</i>	Oscar Wilde

付3 Dickens 以外の36人の作家による36作品 (36N) (Mahlberg, 2013: 180)

Title	Author
<i>Emma</i>	Jane Austen
<i>Lorna Doone, a Romance of Exmoor</i>	R. D. Blackmore
<i>Lady Audley's Secret</i>	Mary Elizabeth Braddon
<i>Agnes Grey</i>	Anne Brontë
<i>Jane Eyre</i>	Charlotte Brontë
<i>Wuthering Heights</i>	Emily Brontë
<i>The Last Days of Pompeii</i>	Edward George Bulwer-Lytton
<i>Antonina or, the Fall of Rome</i>	Wilkie Collins
<i>Lord Jim</i>	Joseph Conrad
<i>Sybil, or the Two Nations</i>	Benjamin Disraeli
<i>The Hound of the Baskervilles</i>	Sir Arthur Conan Doyle
<i>Daniel Deronda</i>	George Eliot
<i>Marriage</i>	Susan Ferrier
<i>Cranford</i>	Elizabeth Gaskell
<i>The Unclassed</i>	George Gissing
<i>Theresa Marchmont or the Maid of Honour</i>	Mrs. Charles Gore
<i>Jude the Obscure</i>	Thomas Hardy
<i>Tom Brown's Schooldays</i>	Thomas Hughes
<i>Alton Locke, Tailor and Poet</i>	Charles Kingsley
<i>Kim</i>	Rudyard Kipling
<i>The Confessions of Harry Lorrequer</i>	Charles James Lever
<i>Deerbrook</i>	Harriet Martineau
<i>The Egoist</i>	George Meredith
<i>A Mummer's Wife</i>	George Moore
<i>Mistress and Maid</i>	Miss Mu1och
<i>Loss and Gain: The Story of a Convert</i>	John Henry Newman
<i>The Cloister and the Hearth</i>	Charles Read
<i>Frankenstein</i>	Mary Shelley
<i>The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde</i>	Robert Louis Stevenson
<i>Dracula</i>	Bram Stoker
<i>Vanity Fair</i>	William Makepeace Thackeray
<i>The Small House at Allington</i>	Anthony Trollope
<i>Robert Elsmere</i>	Mrs. Humphrey Ward
<i>East Lynne</i>	Mrs. Henry Wood
<i>The Picture of Dorian Gray</i>	Oscar Wilde
<i>The Heir of Redclyffe</i>	Charlotte M. Yonge

備考：灰色マーキングされた作品は19Cと重複している。